

疑問文と条件文と非現実比較文の 関係について

山下 豊

疑問文には、直接疑問文と間接疑問文の二通りがある。それと同様に、条件文にも、接続詞のない条件文と、接続詞のある条件文の二通りがある。また、非現実比較文にも、als 型非現実比較文と、als ob 型非現実比較文の二つがある。どれも二つのパターンを使って、表現されている。ここでは、その二つのパターンを持つ疑問文、条件文、非現実比較文の関係を考えてみたいと思う。

疑問文と条件文の関係

A) 直接疑問文と接続詞のない条件文

直接疑問文は、直接相手に問いかけるので、基本的には、直説法が使われる。

Hast du Zeit?

(君は、時間があるのか?)

また、外交的表現ということで、接続法 を使うこともある。

Könnten Sie mir den Weg zum Bahnhof zeigen?

(あなたは、私に、駅への道を教えることが出来ましょうか?)

それと同様に、接続詞のない条件文も、直説法と接続法 が使われる¹⁾。

Hast du Zeit, so sollst du mit mir kommen.

(君に時間があれば、私と一緒に来てほしい。)

Hättest du Zeit, so solltest du mit mir kommen.

(君に時間があつたら、私と一緒に来てほしいのに。)

直接疑問文と接続詞のない条件文は、文型も話法もイコールとなっている。さて、ここで問題があるとするならば、それは、仮の話を持ち出す条件文に直説法が使われているということにあるかも知れない。だが、これは、接続詞のない条件文の由来が大きく関わっている事柄である。接続詞のない条件文は、直接疑問文に由来し²⁾、相手に疑問を發し、それを帰結させることで、成り立っているものである。例えば、

Gibst du mir deine Schwester, so will ich es tun.

(あなたが私に妹をくれれば、私はそれを致しましょう。)

という文は、

Gibst du mir deine Schwester?

(あなたは私に妹をくれますか?)

と相手にたずね、それを

So will ich es tun.

(そうであれば、私はそれを致しましょう。)

と帰結させることで成り立っている。直接疑問文から条件文が生まれているのであれば、条件文の内容がたとえ仮りの話であっても、条件文に直説法現在が使われているのは、当然の成り行きと言えよう。この接続詞のない条件文は、直接疑問文に由来しているわけだから、接続詞のない条件文と言うよりは、直接疑問文型条件文と呼んだ方が、よりふさわしいように思われる。

B) 間接疑問文と接続詞型条件文

上述の直接疑問文と直接疑問文型条件文とは違い、間接疑問文と接続詞型条件文は、一見すると、関係がないように見えるかも知れない。間

接疑問文は、接続詞に ob を使い、条件文は、接続詞に wenn, falls, im Falle, sofern, soweit, so などを使っているからである。現代ドイツ語の範疇では、両者の関係は、分かりづらい。だが、中世高地ドイツ語まで遡ると、両者は、隣り合わせの関係となってくる。間接疑問文は、現代ドイツ語と同様、ob が使われ、それと同時に、条件文にも ob が使われていたからである³⁾。

ob ez iu niht versmâhet, sô rîte ich mit iu dar.⁴⁾

(おまえにとってそれが不名誉とならないならば、わしは、おまえと一緒にそこへ行こう。)

umbe si begunde sorgen wîp unde man,

ob si immer komen solden heim wider in daz lant.⁵⁾

(彼らがいつか再びこの国へ帰って来られるかどうか、彼らのために、女も男も心配した。)

また、話法の点で言えば、間接疑問文では、現代ドイツ語と同様に、接続法現在(接続法)と接続法過去(接続法)が主で、直説法の使用も見られた⁶⁾。

ich wilz versuochen baz,

ob ich noch müge betwingen den übermüeten man.⁷⁾

(わしが、あの思い上がった男を打ち負かすことが出来るかどうか、もう一度試してみたい。)

主語は、ich(私)。助動詞 mugen(出来る)の1人称単数形は、

ich mac	直説法現在
ich muge / müge	接続法現在(接続法)
ich mahte / mohte	直説法過去
ich mähte / möhte	接続法過去(接続法)

なので、müge は、明らかに接続法現在(接続法)である。

ine weiz ob er daz tæte durch sinen hôhen muot.⁸⁾
 (彼がそれを思い上がりの心からしたのかどうか, 私には分からない。)

主語は, er (彼)。動詞 tuon (する) の3人称単数形は,

er tuot	直説法現在
er tuo	接続法現在 (接続法)
er tet / tete	直説法過去
er tæte	接続法過去 (接続法)

なので, tæte は, 明らかに, 接続法過去 (接続法) である。

Daz wil ich versuochen, ob ich iu gehelfen kan.⁹⁾
 (私があなただを助けることが出来るかどうか, それを私は試してみたい。)

主語は, ich (私)。助動詞 kunnen (出来る) の1人称単数形は,

ich kan	直説法現在
ich kunne / künne	接続法現在 (接続法)
ich kunde / (konde)	直説法過去
ich kunde / künde	接続法過去 (接続法)

なので, kan は, 明らかに, 直説法現在である。

それと同様に, 接続詞型条件文でも, 直説法, 接続法過去 (接続法),
 そして, 接続法現在 (接続法) までが使われていた。

ob mir mîn leben bestât,
 sô sult ir aller sorgen, frouwe, haben rât.¹⁰⁾
 (私に生命があるならば, 姫よ, あなたは, あらゆる危険に対し,
 救いを持つことになります)

主語は, mîn leben (私の生命)。bestân / bestên (ある) の3人

称単数形は、

mîn leben bestât / bestêt	直説法現在
mîn leben bestâ / bestê	接続法現在（接続法）
mîn leben bestuont	直説法過去
mîn leben bestüende	接続法過去（接続法）

なので、bestât は、明らかに、直説法現在である。

ob ich ein ritter wære, ich kœme in etwenne bi.¹¹⁾
(私が騎士ならば、折を見て、彼らのもとに行けますものを。)

主語は、ich（私）。動詞 sîn（ある）の1人称単数形は、

ich bin	直説法現在
ich sî / wese	接続法現在（接続法）
ich was	直説法過去
ich wære	接続法過去（接続法）

なので、wære は、明らかに、接続法過去（接続法）である。

ob iuch des iemen vrâge, sô muget ir balde sagen:¹²⁾
(誰かが、あなたに、このことを訊いたならば、きっぱりと言って下さい。)

条件文の主語は、iemen（誰か）。動詞 vrâgen（訊く）の3人称単数形は、

iemen vrâget	直説法現在
iemen vrâge	接続法現在（接続法）
iemen vrâgete	直説法過去
iemen vrâgete	接続法過去（接続法）

なので、vrâge が接続法現在であることは、明らかである。

条件文に接続法現在（接続法）が使えたとなると、語法の点でも、間接疑問文と接続詞型条件文の間に、区別がないことになる。また、先述のごとく、接続詞も同じ ob を使っていたのだから、両者は本当に深い関係にあったということになるだろう。

非現実比較文と条件文と疑問文の関係

上述の如く、条件文と疑問文は、イコールあるいは隣り合わせの状態
で、発展して来たものである。それと同様に、非現実比較文も、条件文
と疑問文と深く関わりながら、発展してきたものである。als wenn,
wie wenn を使う非現実比較文の中には、wenn 条件文を見ることが出
来るし、als ob を使う非現実比較文の中には、ob 条件文ないし ob 間接
疑問文を見ることが出来る。また、als を単独で使う非現実比較文では、
直接疑問文ないし直接疑問文型条件文を見ることが出来る。

A) als 型非現実比較文と直接疑問文と直接疑問文型条件文

現代ドイツ語の als 型非現実比較文の特徴は、als 以降が定動詞倒置
をする点にある。それ故、この種の文に直接疑問文ないし直接疑問文型
条件文を見る人が多い。だが、中世高地ドイツ語まで遡ると、als 型非
現実比較文と直接疑問文の関係ないし als 型非現実比較文と直接疑問文
型条件文の関係は、消えてしまう。als 以下が定動詞倒置をしないから
である¹⁴⁾。定動詞倒置をしなければ、直接疑問文とは完全に関わりが
なくなるし、また、直接疑問文型条件文とも関わりがなくなってしまう。

Er tut so, als wüßte er alles.

（彼は、全てを知っているかのように、振る舞っている。）

Diu zeichen si an bunden, alsô si wolden dan.¹⁴⁾

（彼らは、出陣しようとするかのように、軍旗を結びつけた。）

alsô は、als の前身であり、助動詞である wolden（不定詞は wel-
len）は、alsô の直後になく、定動詞倒置をしていない。

直接疑問文ないし直接疑問文型条件文と関わりがなかった代わりに、

als 型非現実比較文は、現実比較文と表裏一体の関係にあった。als 型非現実比較文と現実比較文との違いが、話法の点にしかなかったからである。非現実比較文には、接続法を使い、現実比較文には、直説法が使われていた。このことは、直説法が事実・現実をありのままに述べ、接続法が事実でないもの、事実と言い切れないもの、現実でないものを述べるということからしてみれば、非常にまっとうな使い分けを両者がしていたことになる。

[現実比較文]

Sifride und Kriemhilde wart beiden dô geseit
 daz ritter dar komen wæren, die trüegen solhiu kleit
sam man ze Burgonden dô der site pflac.¹⁵⁾

(ジーフリトとクリエムヒルトの二人のもとに、知らせが届いた。
ブルグントの地で、しきたりとして行われているような、
 そんな服を身につけた騎士達がやって来たと。)

sam は、「～のような、～のように」を表す接続詞。主語は、
 man (人)。動詞 pflegen (する) の 3 人称単数形は、

man pfliget	直説法現在
man pflege	接続法現在 (接続法)
man pflac	直説法過去
man pflæge	接続法過去 (接続法)

なので、pflac は、明らかに、直説法過去である。

[非現実比較文]

Dô stuont sô minneclîche daz Sigmundes kint,
 sam er entworfen wære an ein permint
von guotes meisters listen.¹⁶⁾

(その時、ジクムントの息子は、非常に優美な姿で立っていた。
あたかも、彼が、マイスターのすばらしい技によって、羊皮紙の上

に描かれたかのように)

主語は，er (彼)。動詞 sîn (ある，いる) の3人称単数形は，

er ist	直説法現在
er sî / wese	接続法現在 (接続法)
er was	直説法過去
er wære	接続法過去 (接続法)

なので，wære は，明らかに，接続法過去 (接続法) である。

もちろん，現代ドイツ語と同様に，接続法現在 (接続法) も使うことが出来た。この型の文が直接疑問文型条件文と関わりがなかったのだから，直接疑問文型条件文の影響によって接続法現在 (接続法) が使えるようになったわけではないだろう。

si varent wol dem gelîche sam ez sî Rüedegêr, ¹⁷⁾

(あたかもそれがリュエデゲールであるがごとくに，
そっくりに，立派に彼らは行進しています。)

主語は，ez (それ)。動詞 sîn (いる，ある) の3人称単数形は，

ez ist	直説法現在
ez sî / wese	接続法現在 (接続法)
ez was	直説法過去
ez wære	接続法過去 (接続法)

なので，sî は，明らかに，接続法現在 (接続法) である。

現代ドイツ語において，非現実話法の一つである非現実比較文に接続法 (接続法現在) が使われているのも，中世高地ドイツ語ですでに接続法現在 (接続法) が使われていたことにその原因があるのであった。また，中世高地ドイツ語の非現実話法に接続法現在 (接続法) が使えることは，先の条件文の例の如くである。

B) als ob 型非現実比較文と接続詞型条件文と間接疑問文

als 型非現実比較文が、直接疑問文・直接疑問文型条件文と関わりがなかったのとは異なり、als ob 型非現実比較文は、接続詞型条件文・間接疑問文と大きな関わりを持っていた。何故ならば、als 以下に、ob 文章が入って来るからである。上述のごとく、ob 文章は、中世ドイツ語で、条件文であると共に、間接疑問文でもあった。また、ob 条件文と間接疑問文は、隣り合わせの状態にあったのだから、als ob 型非現実比較文に条件文ないし間接疑問文を感じ取ることは、非常に理にかなったことでもあった。

では、どちらの影響を大きく受けていたのだろうか。まず、話法の点から言ったら、どうであろうか。現代ドイツ語の場合で考えれば、間接疑問文は、接続法（接続法現在）、接続法（接続法過去）、直説法が使える、条件文は、接続法（接続法現在）が使えず、接続法（接続法過去）、直説法が使える。そして、非現実話法は、間接疑問文と同様に、接続法（接続法現在）、接続法（接続法過去）、直説法¹⁸⁾が使えるので、間接話法の影響の方が大きそうに見えるが、中世高地ドイツ語まで遡れば、間接話法は、現代ドイツ語と変わらず、接続法現在（接続法）、接続法過去（接続法）、直説法が使えるが、条件文は、現代ドイツ語とは違い、接続法過去（接続法）、直説法が使えるばかりか接続法現在（接続法）も使えた¹⁹⁾。それに対して、非現実話法は、先述のごとく、現実比較文との関係で、直説法を使うことが出来ず、接続法現在（接続法）、接続法過去（接続法）だけを使っていた²⁰⁾。それ故、間接話法の話法と条件文の話法は、イコールとなるが、非現実比較文の話法は、直説法が使えないという点で、間接話法の話法と条件文の話法とは、距離が置かれてしまうことになる。つまり、話法の点で、間接話法の影響が大きいか、条件文の影響が大きいかは、言えないということになる。

次に文型の点から言ったら、どうであろうか。現代ドイツ語で考えた場合、

Er tut es so langsam, als ob er genug Zeit hätte.
(彼は、時間が充分にあるがごとくに、それをゆっくりとやっている。)

Er fragte mich, ob er genug Zeit hätte.
(彼は、時間が充分にあるかどうか、私に訊いてきた。)

Er tut es so langsam, als wenn er genug Zeit hätte.
(彼は、時間が充分にあるがごとくに、それをゆっくりとやっている。)

Wenn er genug Zeit hätte, so täte er es langsam.
(彼に充分時間があれば、彼は、それをゆっくりとやるだろうに。)

同じ ob を使っている点では、間接疑問文というように見えるし、また、同じ wenn を使っている点では、条件文というように見える。だが、上記のごとく、中世高地ドイツ語では、条件文も ob を使っており、als ob は als wenn に交代した³⁾。それ故、als 型非現実比較文が大きく影響を受けてきたのは、実際には条件文の方であることになる。もし、間接疑問文の影響の方が大きいのであれば、als ob は、als ob のまま残ったはずだからである。

また、als ob が als wenn に交代したことに伴って、als 型非現実比較文にも条件文の影響が現れ、als 以下が直接疑問文型条件文の形態をとるようになった。つまり、定動詞倒置を起こすことになったのである。

さて、現代ドイツ語の非現実比較文が条件文の影響下にあることは分かっており、また、直接疑問文型条件文が直接疑問文に由来していることも分かっているが、間接疑問文と接続詞型条件文と als ob 型非現実比較文が元来どのような関係にあったかという問題が残されている。その答えとなりそうなのが、ob の語源である。その語源は、vielleicht である²¹⁾。この語源を三者に当てはめて文を処理してみよう。

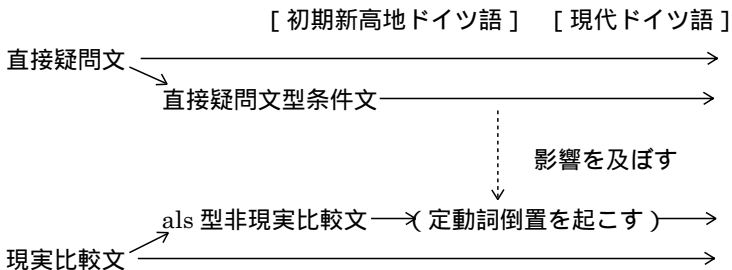
Er fragte mich, ob er genug Zeit hätte. は、「彼は、私に訊いた。彼に十分な時間があるかも知れないと。」となる。また、ob iuch des iemen vrâge, sô muget ir balde sagen:¹²⁾ は、「誰かがあなたにそのこと

を訊くかも知れない。そんな時、あなたは、きっぱりと言って下さい。」となる。そして、Er tut es so langsam, als ob er genug Zeit hätte. は、「彼は、そんな時のようにゆっくりと、それをしている。(つまり)彼に十分に時間があるかも知れない時のように。」となる。この場合、so (現代ドイツ語では、so) と als が時を表す語でもあることが重要なポイントとなって来るだろう。

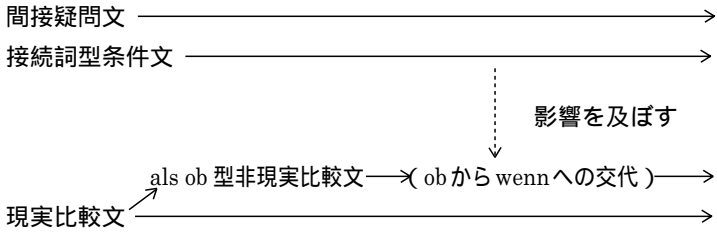
語源を活かせば、以上のような処理が可能となる。この処理を行なうことの意味は、三者の絡み合いをほぐし、一つ処からの出発を可能とする点にあるのではないだろうか。特に、als ob 型非現実条件文の場合は、ob 条件文と ob 間接疑問文からの呪縛から解き放たれ、同じ比較文である現実比較文との関係に納めて行くことが可能となる点に、大きな意味があるはずである。

まとめ

直接疑問文と直接疑問文型条件文と als 型非現実比較文の関係は、以下のようになる。



また、間接疑問文と接続詞型条件文と als ob 型非現実比較文の関係は、次のようになる。



こうして二つのタイプの変遷を並べてみると、直接疑問文型条件文が直接疑問文から来ているのと同様に、接続詞型条件文も間接疑問文から来ているのではないかと思いたいところではあるが、実際には、まだその決着はついていない²²⁾。

註

- 1) 中世高地ドイツ語では、接続法現在 (接続法) も使われていた。
 wil du von mir scheiden, daz tuot mir in dem herzen wê.
 (あなたが私のもとを離れて行こうとするならば、それは私にとって心の底から悲しいことです)
 [*Das Nibelungenlied*, 1.Teil. 924,4]
 主語は、du (あなた)。助動詞 wellen の 2 人称単数形は、

du wil / wile / wilt	直説法現在
du wellest	接続法現在(接続法)
du woltest / woldest	直説法過去
du woltest / woldest / wöltest / wöldest	接続法過去(接続法)

なので、wil は、明らかに直説法現在である。

- 2) Otto Behaghel, *Deutsche Syntax*, Bd. , S.637.
 3) *Trübners Deutsches Wörterbuch*, Bd.5, S.2 u. Bd.8, S.46.
 条件文を導く接続詞として、ob は古くから使われて来たが、wenn の登場により、その座を次第に奪われて行った。wenn が条件文に現れたのは、15 世紀頃からである。
 4) *Das Nibelungenlied*, 1.Teil, 761, 3.
 5) *Das Nibelungenlied*, 1.Teil, 67, 2-3.
 6) Jacob Grimm/Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Bd.13, S.1060.
 7) *Das Nibelungenlied*, 2.Teil, 2059, 2-3.
 8) *Das Nibelungenlied*, 1.Teil, 680, 2.
 9) *Das Nibelungenlied*, 2.Teil, 1986, 1.

- 10) *Das Nibelungenlied*, 1. Teil, 375, 1-2.
- 11) *Das Nibelungenlied*, 2. Teil, 1416, 4.
- 12) *Das Nibelungenlied*, 2. Teil, 2303, 3.
- 13) Hermann Paul, *Deutsches Wörterbuch*, S.18.
- 14) *Das Nibelungenlied*, 1. Teil, 890, 1.
- 15) *Das Nibelungenlied*, 1. Teil, 740, 1-3.
- 16) *Das Nibelungenlied*, 1. Teil, 286, 1-3.
- 17) *Das Nibelungenlied*, 2. Teil, 1180, 3.
- 18) *Duden, Die Grammatik* (= *Duden Bd.4*) , S.107.
- 19) Otto Behaghel, *Deutsche Syntax*, Bd. , S.641.
- 20) Otto Behaghel, *Deutsche Syntax*, Bd. , S.623.
- 21) *Trübners Deutsches Wörterbuch*, Bd.8, S.46.
及 Otto Behaghel, *Deutsche Syntax* Bd. , S.234.
- 22) *Trübners Deutsches Wörterbuch*, Bd.8, S.46.

引用文献

Das Nibelungenlied, Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Herausgegeben, übersetzt und mit einem Anhang versehen von Helmut Brackert. Frankfurt am Main. Fischer 1. Teil 1984, 2. Teil 1983

参考文献

1. 辞典

- Georg Friedrich Benecke, *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, Bd. , /1, /2, . Ausgearbeitet von Wilhelm Müller und Friedrich Zarnke. Leipzig 1854-1861 (Nachdruck. Hildesheim. Olms 1986)
- Jacob Grimm/Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Bd.13. Bearbeitet von Dr. Matthias von Lexer. Leipzig. Hirzel 1889 (Nachdruck. München. Deutscher Taschenbuch Verlag 1984)
- Matthias Lexer, *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*. 3 Bde. Stuttgart. Hirzel 1970
- Matthias Lexer, *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*. Mit den Nachträgen von Ulrich Pretze. 38. Auflage, unveränderter Nachdruck. Stuttgart. Hirzel 1992
- Hermann Paul, *Deutsches Wörterbuch*. Bearbeitet von Werner Betz. 7. durchgesehene Auflage. Tübingen. Niemeyer 1976
- Trübners Deutsches Wörterbuch*, Bd.5. Begründet von Alfred Götze. Herausgegeben von Walther Mitzka. Berlin. Walter de Gruyter 1954
- Trübners Deutsches Wörterbuch*, Bd.8. Begründet von Alfred Götze. Herausgegeben von Walther Mitzka. Berlin. Walter de Gruyter 1957
- 伊藤泰治 / 馬場克弥 / 小栗友一 / 松浦順子 / 有川貴太郎 『中高ドイツ語小辞典』 同学社 1991

2. 文法書

Otto Behaghel, *Deutsche Syntax Eine Geschichtliche Darstellung*, Bd. 1, *Die Satzgebilde*. Heidelberg. Carl Winter's

Universitätsbuchhandlung 1928

Duden, Die Grammatik (= *Duden Bd.4*) Mannheim. Duden 1973

Duden, Die Zweifelsfälle der deutschen Sprache (= *Duden Bd.9*) Mannheim. Duden 1972

Hermann Paul / Walther Mitzka, *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 18. Auflage. Tübingen. Niemeyer 1960

古賀允洋 『演習中高ドイツ語文法』 大学書林 1979

古賀允洋 『改訂増補 中高ドイツ語文法 語形変化表』 東洋出版 1979